

還暦を迎える心境



恵庭市医師会
恵み野病院

橋本 博

北海道医師会会員の皆様、明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひ申し上げます。と言いましても、この原稿を書いております現在はまだ平成26年11月であり、日々の忙しさに埋没していますと、年末も年始もまだまだ遠くに感じます。しかし「新春随想」というお題でありますので、何とかそれらしい文章を物しなければならず、さてどうしたものか悩んだ末に、来年（今年）、ついに迎える「還暦」について書いてみることにしました。

「還暦」、なんとも重々しい言葉であります。その意味を紐解くと（ちょっと偉そうですが、実は単にWikipediaで検索しただけです）、「還暦（かんれき）とは、干支（十干十二支）が一巡し、起算点となった年の干支に戻ることに。通常は人間の年齢について言い、数え年61歳（生まれ年に60を加えた年）を指す。本卦還り（ほんげがえり）ともいう」とのことです（何やら、インターネットで検索して、それをコピペしてレポート作成している学生のように、ちょっと気が引けます）。干が10種（甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸）、支が12種（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）あるわけですが、12支がよく知られている一方で、10干を知る人は少ないのではないのでしょうか（われわれの親世代では、「甲・乙・丙」が「優・良・可」と似た意味で使われていたと思います。私はそれ以外は馴染みがありません）。「甲・乙・丙」を音読みすると「こう、おつ、へい」であり、訓読みすると「きのえ、きのと、ひのえ」となり、12支の訓読みが「ね、うし、とら…」です。10干を知る人は少ないと思いますが、丙午（ひのえうま）はけっこう有名でしょうか。

10と12の組み合わせなら、120通りあるので、同じものは120年に1回かと思いきや、良く考えると最小公倍数である60通りしか現れず、60年で起算点となった年の干支に戻るわけです。例えば「甲亥」は永遠に現れないのです。平成27年（2015年）は乙未（きのとひつじ）、60年に1回現れる私の干支です。10と12の組み合わせで、60年で起算点に戻り、還暦を迎えるというこのシステムが、どのような過程で形作られたのかは、Wikipediaの検索だけでは何とも分かりませんが、60歳という年齢には、おそらく次のような意味があったのではないかと想像され、還暦とは、そのことと無縁ではない状況の中で生まれた

システムではないかと想像します。

・古代～江戸時代の平均寿命は20～30歳であった。しかし記録に残る有名人の寿命を見ると、60～70歳はそう珍しくなく、乳児期を生き延び、運良く感染症や外傷で死ななければ、60歳程度までは生きられたと想像できる。その意味でこの年齢はひとつの目標であったと思われる。

・一方、われわれの子ども時代を思い出しても（そのころの平均寿命は65才前後）、60才という年齢は相当に老いを感じさせるもので、「人生を終える程よい年齢」でもあったと思われる。

このように「還暦」は、人生の目標や区切りとして、意義のあるものであったと思われるのですが、さて現在の日本ではどうでしょうか。今や60歳の平均余命は、今や女性では30年近くあり、男性でも20年を越えている時代です。還暦はとうの昔に「人生の目標」でもなく、「人生を終える程よい年齢」でもなくなっていました。またじつくりと「来し方行く末」を思索しようとしても、あまりの余命の長さ、考える気力も失ってしまいそうです。しかし、しかし、気力を失っている場合ではなさそうです。超高齢化社会を迎えて、社会のシステムは破綻寸前です。この困難な課題をどう克服するのか、日本は世界中から注目されています。若い世代に「おんぶにだっこ」は到底許されず、還暦を迎えても自ら社会を牽引するくらいのパワーが求められるのは、残念ながら、必然的な状況と思われる。

結論、「現在の日本では還暦はひとつの通過点、あるいは新たな出発点である」。

もうこうなったら、開き直って、隠居して楽をしようという夢は捨てて、自分のできることを見つけながら、進んで行くしかないようです。この時代に還暦を迎えることが幸せなのか、不幸せなのか、結論はもう少し先延ばしにしておきます。最後に、NHKの連続ドラマ「花子とアン」で知った言葉を、ご同輩に贈ります。

『曲がり角をまがった先に、何があるのかは、わからない。でも、きっといちばんよいものにちがいないと思うの “I don't know what lies around the bend, but I'm going to believe that the best does”』

この、底抜けのポジティブ思考がなければ、還暦以後を過ごしていくことはできないでしょう。